『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会 vol.4

テキスト『翻訳と連帯　ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

（編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ）

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト https://do-cks.net/works/publication/korea05/ で読めます。QRコードは⇨
264話全訳データは https://fire.st/h6yq1ut にあります。

日時　**4月6日**（土）午後１時15分～４時半

場所　**赤羽北区民センター**（赤羽北ふれあい館）
第１和室（椅子・座布団あり。アクトピア北赤羽六号館３階）
JR埼京線北赤羽駅赤羽口から徒歩1分、北区赤羽2－25－8

参加費　ひとり**500**円（要予約）

主催（予約）前田年昭　メール　tmaeda1966516@gmail.com
電話　080–5075–6869

○参加希望の方は事前にお申し込みください（電話・メール）。
○当日は報告者の問題提起と、感想や意見の交流、討議を行います。
○あらかじめ対象話を読んできてください。電子版を読めない方はご相談ください（今回取り上げる３話のテキストをおくります）。

13：30～14：30　**報告**　土田宏樹（元郵便労働者）
未来の幸福のために（特選集15、第４巻第28話）リ・ヨンスク
トゥマン（豆満）江の氷塊をかき分けて（特選集18、第７巻第９話）キム・ドンギュ
カガヨンでの工作（全訳「敵を瓦解させて」、第３巻第21話）キム・ドンギュ
14：30～16：30　**討議**

第１回読書会（5月20日）で、「回想記」の歴史的背景である1930～40年代の朝鮮人民の抗日革命闘争史を学んだ私たちは、第２回（8月13日）と第３回（12月2日）で、参加者それぞれが選んだ回想記について報告し、全員で意見交換を続けてきました。権力が歴史修正主義をつよめてきている今、差別や抑圧、抵抗の闘いの歴史を知り学ぶことは、私たち自身の生きる糧です。

労働者に国境はありません。被害者にも加害者にもなることなく、国際主義を生きるにはどうすればいいのか。ともに読み考え、話し合いましょう。

第三回読書会での報告を終えて

生きて奴らにやりかえせ！――「敵の回し者」という見方を問い直す

前田年昭（組版労働者）

回想記「死に打ち勝ったチョチャンヂュ」は、日本が1934年に関東軍を30万人から70万人に増強、「集団部落」建設政策によって「包囲討伐」「掃蕩」を繰り広げ、対する人民は、35年、抗日連合統一建制宣言、36年5月、祖国光復会を創立する。

アンド（安図）県は、現在の中国の吉林省朝鮮族自治州にあり白頭山がある地だ。ペク・ハンリムは、後に朝鮮労働党第4回大会で中央委員会候補委員になった幹部である（『現代朝鮮人名辞典』ほか）。35年初めに創設した「チョチャンヂュ（車廠子）遊撃根拠地で、人民は土地から文字までを手にしたが、9月には敵の集中攻撃に対して、根拠地の解散という苦渋の決断を強いられる。解散して敵統治地域に下りていく人民が遊撃隊員に語った「骨が砕けて粉になることがあろうとも革命のために生きます」という言葉は胸を打つ。

報告で私は以下の点を強調した。パルチザンは武勇伝ではない。力の源泉はモノではなく人であり、生きるための思想である。回想記は「隊列内に潜入した反革命分子」のしわざと書くが、ウェブ「朝鮮族ネット」は、革命政府の歩哨たちさえ「飢えに堪えられずに、人々の目を避けて種子を掘り出して食べた」と描く。比較すれば私には、後者が本当に思えた。弱さを克服して共に生きようとすれば、〝外〟の排除ではなく、〝内〟からの変革が必要となる。「ある」を土台にした団結ではなく、何ひとつ「ない」者同士が「よってたかって闘う」という団結が、力を発揮すると私は信じる。「生きて奴らにやりかえせ！」である。

「正しい敵」の存在しえない時代に――「我々の思想」を打ち鍛えよ！

キム・ヨンイル（福祉労働者）

第三回では、『いつどこでも革命的警戒心を高めなければならない』『敵を瓦解させて』を選び、報告した。この二話は、それぞれ防諜と工作について書かれているが、革命戦争においても欠かせない活動であり、また防諜と工作は表裏一体である。以下は各話の要約である。【2面につづく】

【1面からのつづき】

『いつどこでも革命的警戒心を高めなければならない』…遊撃隊に志願して入隊した青年は、自ら進んで任務をこなし、同志からの評判も良い。しかし、その仕事をよく観察すると、できるはずのことができず（薪割り）、できないはずのことができる（武器の取扱）。加えて、不自然で不必要な言動を情報収集と察知した遊撃隊は、日帝に徹底的に訓練され偽装されたスパイであった青年を摘発した。敵の謀略を粉砕するためには、革命思想で武装し、緊張感と洞察力を持たなければならないという教訓である。

『敵を瓦解させて』…遊撃隊活動の障害となっていた偽満軍・傀儡（かいらい）警察・自警団への瓦解工作。任務は、遊撃隊に恐怖しているという警察分署長に工作し、革命の側に引きいれるか、さもなくば無害化するのが目標である。分署長の姻戚にあたる老人を革命の側に立つよう教育し、彼を通じて分署長に接近する計画を立てていたが、偶然にも接触が訪れてしまった。そこで、反日闘争の正当性を説きつつ、阿片と銃弾の交換の取引を持ち掛けた。日帝の走狗機関への工作においては、民族的自覚を刺激するだけでなく、遊撃隊を幇助（ほうじょ）させることによって日帝を裏切り寝返らせず、ひいては主体的に遊撃隊に協力するようになるまで育てることが重要である。この工作は成功し、遊撃隊は分署を公然と訪れ、署の警察官とその傘下の自衛団員、そしてついには偽満軍中隊長さえも影響下においた。

一方、カール・シュミットの『パルチザンの理論』を参照して、概念整理を行った。パルチザンは、その非正規性、ゲリラ性はもとより、目的意識によって結び付けられた組織の強い結束が最大の特徴である。20世紀の民族解放闘争、革命戦争を同時代的に捉えた本書に学ぶ点は多い。特に、敵という概念を「在来的な敵」「現実の敵」「絶対的な敵」と三種類に分類した分析は、ポスト対テロ戦争とでも言えそうな現在でも有益な補助線となるだろう。「在来的な敵」「現実の敵」は敵を犯罪者として差別することなく「正しい敵」として認識するが、「絶対的な敵」は処罰されるべき、絶滅されるべき犯罪者や非人間として、一方的に有罪化されるものである。となると、現在は「正しい敵」が存在しえない時代と言える。

にもかかわらず、チアパスにおけるサパティスタ民族解放軍、ロジャヴァにおけるクルド人民防衛隊、パレスチナにおけるハマース、そしてアフガニスタンを「奪還」したタリバンなどが、それぞれの地域を実効支配できるのはなぜか。その合法性を担保するのは正統性であり、正統性を担保するのは倫理であるから、革命運動は人民に顔向けできない歴史を残してはならないだろう。

上記の通り報告した後の討議では、『敵を瓦解させて』における工作の正当性が議論となった。

第一に、工作に阿片を利用することの問題。回想記でも時折登場する阿片は、近代においては人民の健康を害し経済を混乱させる一種の「兵器」であったことを考えれば（阿片戦争）、それを革命運動において利用していいのか？

第二に、阿片と銃弾の取引にみられるような弱みの利用について。革命運動は人民に顔向けできない歴史を残してはならないのであれば、敵とは一線を画さなければいけない。弱みを利用して形成された関係ではお互いを信じることはできないのではないか。

この二点の指摘に対して強く感謝する。討議の際には、当たり障りのない応答しか返せなかったような気がするが、正直に言えば動揺したのである。具体的には、阿片、および弱みの利用について、「革命戦争というものはそういうものだろう」と考えていたのだ。第二回の報告でも革命戦争のリアリズムと書いたが、例外的な状況で正しいことができない、筋の通らない選択がある時、どこかに革命倫理の線を引き、そこからの逸脱を最小限にとどめることが重要なはずだ（また、革命戦争でなくとも、大衆運動でも解決困難な矛盾は時に訪れる）。革命戦争と革命運動、正統性と正当性、己の語彙選びを一つとっても、発想が統治の側へと地滑りし、誤った選択を合理化する方向に向かっているのかもしれないと気づかされた。

つまり、私たちに求められているのは、抗日パルチザン闘争に対して、総論では支持をし、各論では批判的に向かいあうことではないのか。そのようにして、回想記は集合的に読まれ、「我々の思想」は打ち鍛えられていくはずだ。

メーリングリスト上でのその後のやりとり

線引きを個別具体的に扱いたい

須田光照

キムさんの報告のまとめを興味深く読みました。

特に報告時の討議で出た阿片を使った工作の正当性をめぐる「動揺」は私も同じ感じでした。

まさに私がやっている労働運動の日常でも「勝つためには何をやってもいいのか」「いや勝たないと意味がないだろう」といったやり取りが、組織の中でも、私自身の中でも、常にくり返されているからです。

それは前田さんの報告で出た「隊列内に潜入した反革命分子」という記述への疑問についても共通する話で、味方の隊列内でしばしば発生する私たちのだれもが持つ「弱さ」ゆえの組織規律からの「逸脱」という現象にどのように向き合うべきかということでも私は似たような「動揺」を感じました。

「革命運動とはそういうもんだろう」と開き直るつもりはありませんが、それでも闘争の中では通常の人間社会では取り除かれるべき行為（たとえば暴力や罵倒など）も敵に対しては目的や態様などの条件がクリアされれば一定限度は許されるべきだとやはり私は考えています。

いずれにしましても、キムさんと同じく、あの討議で出た指摘はとても貴重（とくに私自身や私の周囲から見ると）に感じられ、私もありがたかったです。

当面は私自身の中の「動揺」を大切にしつつ、「どこまでが許されて、どこからは許されないのか」という線引きを個別具体的に慎重に取り扱っていきたいと思いました。また、味方の隊列内での「弱さ」ゆえの「逸脱」行為についても、単に切り捨てるのではなく正しく批判しながら全体で克服していく道を探っていきたいと思いました。

総論支持・各論批判はなりたつか

前田年昭

キムさんの「第3回報告」と、それに対する須田さんの「コメント」に、私は賛成ではありません。

「勝つためには何をやってもいいのか」という問題の立て方は、「何をやっても」という言葉のなかに、否定の答えが含まれています。つまり、「何をやってもいい」ってわけじゃない、やっていいことといけないことがある、という――いっけん「正論」に見えても役に立たない形式論理になってしまうと、私は思います。

同様に、「総論では支持をし、各論では批判的に向かいあう」という意見にも疑問と批判を感じざるをえません。

私は、かつて属していた組織（複数）のなかで、他の組織や運動の宣伝ステッカーの上に、自分たちの組織や運動のステッカーを貼る行為を批判しました。が、だれからも反批判はなく、「そんなカタいことは言わないで…」とか「小さなこと」と言われて黙殺されました。

また、属していた別の組織で、経済活動上の失敗を総括する際に、私は「経済での誤りは、政治路線の誤りの反映だ」と批判しましたが、「経済活動の分野では誤りがあったが、基本的・政治的な方向は正しかった」と言われ黙殺されました。誤りは部分であり、各論だと言われたのです。そんなことがあるでしょうか。

個別、具体、特殊のことがらをとおしてしか「総論」は成立しないわけですから、あくまでその個別、具体、特殊が、正しいか正しくないかという議論から始めるしかないと、私は考えています。自分自身のありかたを離れて、客観的な目標とそのための手練手管を考えることは、無原理なプラグマティズムです。

社会主義・共産主義のさまざまな否定的な問題点を「各論」だとして目を背けてきた結果が、現在のロシアや中国のひどい現状、およびこれに対する左翼の沈黙、そして大衆の離反を生んでいるのだという基本的な現状認識から出発したいと私は考えています。